

## 学びの極意

【プロフィール】

1949年4月11日生まれ。福岡県福岡市出身。O型。福岡教育大学卒業(2008年に名誉学士授与)。72年、フォークグループ「海援隊」でデビュー。翌年「母に捧げるバラード」が大ヒット。日本レコード大賞企画賞受賞。77年には山田洋次監督の映画「幸福の黄色いハンカチ」に出演。「3年B組金八先生」「101回目のプロポーズ」「水戸黄門」などのドラマにも出演。



歌手・俳優 <sup>たけだ てつや</sup> 武田 鉄矢

初めまして。武田鉄矢と申します。

編集の方よりご丁寧な寄稿のご依頼を頂きまして、埼玉県下の先生方に何か教育について語って欲しいとのご依頼です。この編集の方が昨年上梓致しました拙著『老いと学びの極意 団塊世代の人生ノート』（文春新書）という私の本を読んで下さり、此の度のご縁となりました。是非とお引き受けした次第ですが、「学びの極意」などという古めかしい言葉使いの奴だということをしりながら、お読み下されば有難し、です。「学び」の奥に、まだ「極意」があることを信じている世代です。「学びの極意」とはいささか風呂敷の広げ過ぎですが、まあ大風呂敷の方が使い勝手のよいもので、青春の頃、私も教師を目指して教員養成の国立大に通っておりました。さて、そんなところから話を振り出します。小・中学校か特別支援学校の教員になるべく学んでおりましたが、別段、志あつてのことでなく、母の強い奨めゆえでした。母は教職への憧れの強い人で、しきりに「世間体がいい」と呟いておりました。タバコ屋とミシンを踏んで繕い物の稼ぎで収入を得ている母の呼び名は「タバコ屋のおばさん」でしたが、私が教師になると、「先生のお母さん」へと昇格するというのが母を励ます夢でした。少女の頃、養女に出されて、苦勞した母です。針仕事に追われつつ、溜息混じりに「学問がないばかり」と境涯を嘆く事がありました。高い教育への強い憧れがあったのでしょう。この母の口癖はずうっと心に引っ掛かっておりました。

母の勞苦は「学問」がないからなのか。「学問」がないから、手足を使って働かねばならないのか。ならば、「学問」とは人の職業を峻別する秤ではないか、とも思えるわけです。人の優劣を秤で計る教職という仕事は母の言う通りに、「世間体がいい」とも思えなかったのです。まあ、このあたり、母の深意を汲み取れなかった若気の至り。後に考えを改めるのですが、「学び」についていささか拗ねた感情で過ごしておりました。

人には「知っている」と「知らない」ことがある。そして、「知らない」ことには「知らない」ことを自覚している場合と「知らない」ことを「知らない」

場合がある。この世界というものは、そんな「知っている」と「知らない」で出来ており、教師とはその「知っている」側へ子供を導き渡す啓蒙者である、とまあ、辞書みたいな解釈をしておりました。こんな解釈ですので、では教師は「知らない」ことに対してどう啓蒙するのかと問えば、「知らない」ことは「知らない」わけですから無力なものです。そんな粗い、雑な感情ですから「学び」を捉え損なつたのでしょね。

私は教職にあまり魅力を見出せず、教育大から脱走します。大学四年の秋、フォークシンガーという新興の音楽ジャンルに憧れて東京へ家出。母の期待を裏切りました。「学問」を打ち捨てて、歌手を目指したわけで、四年にわたり母が納め続けた学費は、ドブに捨てたも同然の出費となったわけです。落胆も深かつたでしょう。

ところがです。母は意地の人。次男坊を教師に仕立て上げる夢捨て難く、学費を納め続けたのです。大学側も休学、退学の手続きなく学費は納入され続けるので、除籍には出来ずそのまま在籍扱いに。なので、一般教養の講義授業で私の名は八年間、呼ばれ続けたそうです。そして時折、教授の出欠を問う声に「ハイ」と出席の声が上がったそうで、勿論この声は後輩達の悪戯ですが、教授達にも伸びやかな方がおられ、「昨日、東京のテレビに出ていたが、福岡の今朝の授業によく間に合ったねえ」と応じられ、階段教室が大爆笑に包まれたということもあつたそうです。その校則の八年が過ぎ、母の元に自主退学手続きの勧告が届きました。本人の署名が必要との事で博多からの電話を東京で受けたのです。私は大学にまだ籍が在つたことにそこで驚いたのです。何と私は三十路過ぎまで学生身分であつたと知つたわけで、八年も納め続けた学費の無念を愚痴られると覚悟したのですが…母はさっぱりしたものでした。母は晴々とうこう洩らしました。

「お前に学問ばさせてよかつた」と。このひとりで、ハッと気付きました。母の言う、「学問」とは教員資格の卒業証書ではなかつたのです。母は十年に渡つて納め続けた学費を徒勞としていなかつたのです。

理由はその当時の私の状況です。私はその頃、テレ

ビドラマの仕事に励んでおり、<sup>やくどころ</sup>役所は東京下町、足立区荒川ほとりの桜中学教師、金八先生を演じておりました。これは放送中から凄く人気ドラマになりまして、ご近所の方が「立派な先生になったねえ」と持ち上げると母は、「福岡県の先生にするつもりが、道を間違えてテレビで先生しております」と笑ったそうです。これ、人気者になった次男坊の自慢ではありません。母の晴れやかさは、学費が無駄にならなかったことです。俗な言い方をしますと、元手を取り返した始末のよさ。「何のため」に「どう使う」か、「学問」はそんなこと考えない。「そのため」に「そう使った」という事後に出現する始末こそが「学問」で、教育大での「学び」を教師役に変換した工夫が母の言う「学問」にピッタリ適ったのでしょう。

「学び」は「生きる力」に変換された時、意味として出現するという仕掛けです。ややこしい手順ですが「学び」の極意はこのややこしさの中に隠れています。さて、ここからその「学びの極意」へ進みます。人の「学び」にはとても不思議な様相があります。それは「知っている」ことをすべて忘れて「知らない」という境位に立たねば使い物にならない「学びの極意」がある事です。

以下は佐々木正人著『あらゆるところに同時にいるアフォーダンスの幾何学』（学芸みらい社）で見つけた「極意」のエピソードです。

問題行動のある十歳の少年と心理療法士の先生が語り合っています。何かにつけて反論の多い少年ですが、二人を弾ませる共通の話題が見つかりました。釣りです。その釣りの中でも最もややこしいフライフィッシングという溪流での釣りです。蜘蛛の糸ほどの細い糸に羽虫や蛹、幼虫の疑似餌を結び、中細のリーダーという糸、更にリールに繋がるラインの太糸に結んでこれを竿で操ります。この竿の操り方がややこしく虚空に無限の記号に似たループの輪を描きつつ、1グラムに満たないフライを溪流に落とします。岩陰や流れにひそむイワナ、ヤマメの上に今力尽きて落ちたカゲロウや生まれたばかりの蛹を演じつつ、落とすのです。両者の距離は時として数メートルから十数メートルほど。かなり難しい釣りです。しかし腕のある人はこの1グラムの疑似餌を十メートル以上離れた紙コップの中にフワリと落とす技術があります。

少年は先生に夢中でその難しさを語っていました。竿の操り方ばかりか、フライと釣り糸のラインは季節の天候、風、溪流の水流、速さ、そして水温など、様々な要因が釣果に影響します。そのそれぞれの要因を少年が語っている時、先生は重大な指摘をします。

「君は上手なんだ。いろんなことを知っている。でも君が一番大事なことに気付いていない。竿の振り方、力加減、キャストの角度、流れのどこにフライを落とすか。君はすべて知っているかもしれないが、

釣りをする時、君はそんなことひとつも考えていない筈だよ。君が考えていることを当ててあげよう。“あそこに魚がいる。あそこにフライを飛ばして、あそこに落ちる”そのことだけに集中して、後は全部忘れてる筈だよ」

これこそが「学びの極意」です。「学び」を「何のため」に「どう使うか」そんな操作は考えてはならない。それは身体に委せることである。

先生は少年に言います。「君が考えることはたったひとつ、狙いをつけることだよ」見事な指摘です。含意のある指摘です。

これは釣りの話ながら、その「極意」は「学び」の本質をついています。この話を広げます。私達が地上の生き物の中で、これほど長い期間を「学び」のために学校に通い続けるのは「学び」を身体に委せる習慣を作るためです。この「学び」の習慣だけが「生きる力」になります。この習慣を失うと「生きる力」を失うことになります。「何のため」に「どう使う」かそれを目標にしてはいけません。動くうちに、使っているのが「学び」であり、「学び」を理由にして動くと「生きる力」を失うことになります。母の「学問させてよかった」の結論はこの理屈です。

私が先生方の苦勞を偲ぶのは、教育のこのややこしさ故です。「何のために勉強しなければならないのですか」と質問して来る少年少女達に、「狙いをつけるためだよ」と論しても説得は出来ないでしょう。ここに「教育」の歯痒さがあります。「教育」の理想は「知っていること」を一度すべて「知らない」ことにして、それでも動いている「私」を知るところにあるからで、「学び」を「生きる力」に変換する、これが手順です。この手順こそが「学びの極意」です。

珍妙な喩えですが、その手順はけん玉の上達法に似ています。けん玉の一番の上達法は「言葉を使うな」だそうです。あのT字型を操りながら、赤い玉を振る手の力、その赤玉にかかる重力と遠心力、軸力を感じつつ赤い玉を運び、操る。「考えて動く」ではなく「動いて考える」のがコツだそうです。理屈っぽい文章ですみません。でも、このややこしさの中に「教育」はあると思うのです。先生はいつも目の前の子供ではなく、未来を生きているであろう子供に語りかける仕事です。未来完了形の職業なんです。

「出来ない」と嘆く子に、「出来ている」未来を説いて、そこへ向かって歩かせる作業なわけで、魔法にかけるような仕事なんですね。

今を保留してその未来を思い描く、これが「学びの極意」です。

ややこしい話ですみません。しかし「学びの極意」を手にする作法は簡単です。まずはまっすぐに手を挙げ、柔らかな声で「よく判りません。教えて下さい」と言えたら良いのです。生徒さん達にそうお伝え下さい。